

広島県にローカライズした小学校教員の

養成・採用・研修の一体化に向けた研究

―地域拠点としての広島県小学校教員養成コンソーシアムの設立に向けて―

	研究代表者	権藤 敦子 (初等カリキュラム開発講座)		
研究分担者	朝倉 淳 (初等カリキュラム開発講座)	伊藤 圭子 (初等カリキュラム開発講座)		
	植田 敦三 (初等カリキュラム開発講座)	木原成一郎 (初等カリキュラム開発講座)		
	木村 博一 (初等カリキュラム開発講座)	難波 博孝 (初等カリキュラム開発講座)		
	松本 仁志 (初等カリキュラム開発講座)	山崎 敬人 (初等カリキュラム開発講座)		
	池田 吏志 (初等カリキュラム開発講座)	岩坂 泰子 (初等カリキュラム開発講座)		
	寺内 大輔 (初等カリキュラム開発講座)	永田 忠道 (初等カリキュラム開発講座)		
	中村 和世 (初等カリキュラム開発講座)	松宮奈賀子 (初等カリキュラム開発講座)		
	松浦 武人 (教職開発講座)	大後戸一樹 (教職開発講座)		
	研究協力者	中西 正人 (大阪教育大学)	徳永 隆治 (安田女子大学)	
		岡本 徹 (広島修道大学)	川西 正行 (広島文教女子大学)	

I 研究の背景と目的

平成27年12月、中央教育審議会は、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」を答申し「『教科に関する科目』と『教職に関する科目』等の科目区分を撤廃し、新たな教育課題等に対応できること (p.31)」が示された。また、養成・採用・研修を通じた「学び続ける教員を支えるキャリアシステムの構築のための体制整備」として「教員養成コアカリキュラムを関係者が協同で作成すること」が課題として示された。

これを受けて、教育学研究科では初等カリキュラム開発講座の教員を中心に、文部科学省から「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」の委託事業を受けることになり、「「学び続ける教員」を育成する小学校教員養成モデルコアカリキュラムの開発」を行うこととなった。この事業では、日本全国の国公立大学などの大学の教員養成課程でも実施可能な汎用性を持つ、モデルコアカリキュラムを開発することとなっている。一方、広島県には広島県独自の歴史・文化・状況があり、教員養成・採用・研究にも独自の歴史・現状を有している。したがって、汎用的な小学校教員養成モデルコアカリキュラムができたとしても、それを、広島県の〈文脈〉に合わせた「ローカライズ」を行う必要がある。

そこで、本共同研究では、将来的には、小学校教員養成モデルコアカリキュラムを継続的に評価・改善していくための地域拠点としての「広島県小学校教員養成コンソーシアム」を設立することを展望し、教員養成に関わる連携事業の実態を調査し、特色ある連携事業を行っている事業のキーパーソンへのインタビューを行うとともに、将来、「広島県小学校教員養成コンソーシアム」のメンバーとなるであろう広島県内の複数の私立大学の教員に、所属校の小学校教員養成の現況と、コアカリキュラムについての意見をいただき、長期的な視野に立った広島県小学校教育の発展に資するようにする。

(権藤敦子*)

Ⅱ 中西正人氏（大阪教育大学理事・副学長 府立高校教職コンソーシアム担当）へのインタビューの要約と考察

全国の大学コンソーシアムの中で、教員養成に関わるコンソーシアムうち、一定の年度にわたり継続して行っているのが、（大阪）府立高校教職コンソーシアムであった。そこで、このコンソーシアムの創立者であり責任者でもある中西正人氏にインタビューを行い、コンソーシアムの歴史と現状を聞くことにした。

1. インタビューの要約

もともと私は大阪府の行政職として府庁で仕事をしてきて、公務員生活の終わりのほうで教育次長3年と教育長を平成21年から平成25年の3月まで4年1期やりました。退職をして一年後に大阪教育大学からお誘いを受けて自分としてもう一遍教育にかかわりたかった思いがありましたので、お引き受けして、平成26年4月に大学に参りました。

ちょうど僕が教育長時代に、大阪にいわゆる進学指導特色校「スーパーグローバルリーダーズハイスクール」10校をつくっているのです。その10校と京都大学や大阪大学との連携協定を結びまして、キャンパスガイドをはじめとする交流事業をやったのです。

それはスーパーグローバルハイスクールの生徒たちが大学の1日体験なんかをさせてもらって、大学を具体的に知り、進学する道も開くというねらいでやりました。それで、大阪教育大の一員になりましたので何か大阪府教育委員会や府立高校と大阪教育大で、それらの教育版で発展させたような形ができないかなという問題意識を持ってしまして、八尾高校、寝屋川高校、泉陽高校、生野高校という、この4つというのは教育大への進学者数が一番多いのですが、その4校の校長がいずれも親しい校長だったので「何かやりたいと思ってんねんやけど、どうや」というような話をしました。それでできたのが、いわゆる「府立高校教職コンソーシアム」で、平成26年12月に結成されました。

最初に、阪大や京大とやったキャンパスガイドはまずやろうということになりました。うちのキャンパスガイドで僕は非常に良かったなと思っているのは、かなりの部分を学生に運営させているのですよ。この学生たちは府立高校の卒業生を中心に「大教大キューピッド」というのをつくってもらってまして、そのキューピッドのメンバーがキャンパスガイドの司会進行もやりますし、大学紹介も自分たちでやるのです。

やっぱり大学生がかかわることで高校生の満足度がすごく上がります。大きい集団でなく小さい集団でコミュニケーションを取れるというのが、やっぱりこのイベントの売りで、満足度が高まります。

200人近い高校生と60人ぐらいの大学生で、7～8人のグループに二人くらいが付くような形で、かなり時間も取って大学施設を案内し、一緒に学食でお昼ごはんを食べ、語り合います。学生が非常に主体的にやってくれ、コーディネートしてくれています。

キャンパスガイド以外どんなことがあるのかなというので、そのときの意見交換会の中で声としてかなりあったのは、やっぱり今、若手教員が足りなくなってきた、その若手教員の育成で非常に苦労しているし、そこへ大学の力を貸してほしいという声もかなり強くありまして、それで「教師の学び舎」という教師塾をやりました。

それであとやっぱり情報をつなぐ媒体がいるという思いもありまして「学びの架け橋」というメールマガジンをやりました。学長のあいさつと、僕がちょっとエッセイを書いて、これもリレーエッセイですと続いているのです。出身、加盟校の卒業生の紹介コーナー

とか、順番に加盟校の学校紹介それに、大学のトピックス、この基本パターンはずっと踏襲してしまっていて、3カ月に一遍くらいで発行しています。

これら三つの事業をやる中でちょっと思い付きのアイデアとして出てきたのが「作文コンクール」なのです。やっぱり高校生が主体的に参加をするようなものが是非ほしいなというので、作文コンクールをやって優秀作品をこのキャンパスガイドで表彰し、発表してもらうことにしました。

これらをやりつつ2年目から始めたのが「教師にまっすぐ」です。要は府立高校の教員志望の生徒に来てもらって、うちでちゃんと教師に育てて、現場に送り返せるようにしようというのがそもそもの狙いなものですから、高校生向けの塾としてこれを始めました。

去年の夏からですけれども、実践的に夏休みに取り組んでいただくということで3回コースになっています。初回7月にやりまして、そのときは「先生という仕事は」という内容で交流し、あとワークショップで、グループワークを中心にやっています。2回目はオープンキャンパスに参加してもらって、模擬授業を受けていただき、あとで、またみんなが集まって、その見学したこととかの振り返りをやります。そこで、作文を書き、最後に修了式をやります。

まず、費用もですが、労力的なものがかかります。事実上は広報のチームとうちの入試のチームが中心にやってくれているのです。それ以外は趣旨に賛同してくれている個人的メンバーの寄り合いに近いところがありますね。

教員のメンバーについては講師陣にはかなり教職大学院、教職センターの教員がなってくれているのですけれども、あとは一本釣りのな感じでいろいろ頼んどとか。ですから大学の一般の教員にどこまで認知していただくか、大学全体にどう根付かせるかというところが今一番の課題だと思っています。

また、高校側については、ニーズはありますけれども、高校もやっぱり多忙なのですよね、本当に。気持ちはあってもなかなかというのが。ですから、参加したいという希望がある方はたくさんいると思うのですけれども、連絡が十分に末端までいってないかなというところは感じています。

事業として3年目を迎えたのですけれども、今、続けていく中で、ある程度手応え的なものは感じつつありますので、アンケートの結果とかを見ましても、この事業に参加した生徒さんはやっぱり先生になりたいという気持ちが高まったり、学習意欲が高まったみたいな感じの回答をいただいていますので、それが実際の入試に反映されて実際に入ってくれたり、その中である程度いい成績で先生になっていただくとかいうふうになれば、成果として認められるかなと思えば追跡調査も必要だと思います。(要約文責 難波博孝*)

2. 考察

このインタビューで明らかなように、連携事業は人を繋いでいく事業であるから人脈が大事になる一方で、キーとなる人間に依存してしまう危険性がある。大阪教育大学の連携事業は大きな広がりをつながりを作ってきたが、中西副学長や固定化したメンバーによる仕事であるため、異動などで部署が変わると継続しなくなる。それは、連携先の高等学校も同様であった。連携事業をいかにして組織の通常業務としてシステムの位置づけるかが重要であることがわかった。(難波博孝*)

Ⅲ 広島県内私立大学における小学校教員養成の現状

広島県において小学校教員養成に関わるコンソーシアム設立に向けて、まずは、広島県内私立大学においてどのような小学校教員養成が行われているかを知る必要がある。そこで、広島県において小学校教員養成を行っている代表的な三つの私学の教員に小学校教員養成の現状をインタビュー調査した。

1. 安田女子大学の場合（研究協力者 徳永隆治氏）

安田女子大学児童教育学科は、創設者安田リヨウの建学の精神「柔しく剛く（やさしくつよく）」を受け、「柔しさ」と「剛さ」を兼ね備えた自立した女性であり、専門的な知識・技能を備え、実践的な指導力と研究能力を持ち、時代の変化や社会の要請に対応できる教員養成を目的としている学科です。教育者としての倫理観・使命感を持って権利と義務を行使できる能力、教育組織の一人として責任と情熱を持って教育学に携わることができる能力、それから教職者としての意識を高めていくこと、あるいは小学校学習指導要領をしっかりと理解して適正に指導できるようにすることを目標としているところです。それから幅広い教養、あるいは道徳性とか、教職に対する自覚と責任感とか、そういうところを目標としている。それから教師自らが課題を発見し、課題解決に取り組むような、そしてそれを表現していく思考力・判断力・表現力をしっかり身に付ける。それから自立性の確立、人への優しい対応、状況を踏まえた判断力とか社会性・コミュニケーション能力の育成ということも目標にしている。職場での人間関係、保護者や地域の人たちとの人間関係などを重視したコミュニケーション能力の育成ということに力を入れていこうとしているところです。情報収集能力、活用能力、言語能力ということも目標にしております。それから多様性の受容、何においても人を思いやる柔軟な態度ということも目標にしています。さらに小学校教員として子ども理解と愛情を持ってきめ細やかな対応力、それと子ども相互の民主的な人間関係をつくり上げていくという意識をしっかりと植え付けよう、それをもって実践的指導力を高めていきたい、こういうところを育成すべき教員像として持ちながら教育目標としているところです。

それらを可能にするための教育課程についてです。「特別科目」「共通教育科目」「専門教育科目」の3つで構成をしております。この中の「特別科目」とは、まほろば教養ゼミといい、これは1年から4年まで全セメスターにおいてクラス単位での講義、チューターが中心になった講義をしたり、学生の諸々の活動を通して学修を深めたり、学生生活のあり方や教職に関しての意識の高揚を図っていく機会として、あるいはコミュニケーション能力の育成を目指して、卒業必修として設定しています。それから「共通教育科目」はキャリア科目と教養科目と基礎科目に分類をしておりますが、キャリア科目というのは人としての生き方や働き方を考えていく領域として、教養科目というのは人間理解、社会理解、国際理解、科学技術の理解という大きな4分野に分けた科目を設定しています。それから基礎科目としましては情報処理と健康スポーツと外国語と基礎養成、この4つに分類されています。「専門教育科目」につきましては、教育職員免許法に示されている科目に限らないで、様々な要素を付加しています。それは教員に必要な資質、幅広い観点からの総合的な力、それから何よりも小学校教員としての専門性を高めていくためです。免許法に比べかなり多くの教科を必修にしていることが特徴と言えば特徴です。学生にとってみれば非常に厳しいカリキュラムなのですが、別紙のような教育課程を組んでいます。

それから教育課程の中で一つ特徴的には「教職キャリアデザイン」という学科独自の科目を設置しています。1年生から4年まで毎年、教職関係の科目を継続的に学習させるということで、カリキュラムを組んでおります。

教職課程以外のところでは、18年度から広島市の教育委員会と協定を結んで学校等支援活動を、毎年小学校の希望学生で大体50名前後が市内の小学校に行って学校等支援活動に参加させてもらっています。それから広島県の教師養成塾や広島市のひろしま未来教師セミナーがスタートしましたので、県の教師養成塾には1年生が今のところ10名、ひろしま未来教師セミナーのほうには2年生と3年生で32名が参加させていただいています。そのほかに小学校へ随時、ボランティア活動に行かせてもらい、学校等支援活動とは別に各学校にお願いをしながら小学校でボランティア活動をさせてもらっています。それから昨年度より文科省の私立大学研究ブランディング事業「小学校での英語教育を実質化する教員養成・研修システムの研究開発と展開」を受けて、平成32年度まで5年間の取り組みの一環として学生、あるいは市内の公立小学校の現職の先生等を30名、アメリカのカリフォルニア大学のデービス校（University of California, Davis）に1カ月間の短期留学をして英語研修をすると同時に、国内でオンラインでの英語教育をしながら、英語教育教員養成のあり方を探っていくという事業を開始しました。その一環としても、これは全員の学生が対象ではないのですが、英語教育の具体的な教員養成としての取り組みをしているというところではあります。

教育方法としてはICT教育で、入学時からパソコンを全員に貸与するというかたちでICT教育を充実させていこうとしています。それからカリキュラムツリーをはっきりさせて、カリキュラムツリーに準じて教育課程の中に水準コードを挙げ、この水準コードに沿いながら段階的に履修をしていくというかたちを取れるようにしています。このほかCAP制（キャップ制）を取り入れ、GPAが3.0未満は24単位までという、もちろん教育実習とか先ほどの教職キャリアデザインとか外国語とかは対象から外してはいるのですが、大半の科目にCAP制をかけて実施しています。それからチューター制度というか、学級担任制度を設けて、クラス単位で学生の学業・生活についての面倒をみていこうというチューター制度をかなり徹底してやっています。それに加えてオフィスアワーだとか、2年前から全員が携帯電話を持つなどによって、学生との連携がスムーズに取れるようにというかたちを取ってきているところではあります。

課題としましては、非常にタイトなカリキュラムを組んでいますので、学生が空き時間をつくりにくい、余裕を持って学習することができない、そして同時にボランティア活動になかなか出て行きにくいという問題があります。コアカリキュラムに関しては現状のカリキュラムを基本に修正をしようとしているところですが、空きコマがないということが非常に大きな課題になっていますので少し科目の見直しをしなければいけないのかな、場合によっては小学校教諭、養護教諭、幼稚園教諭・保育士のコース制を取らなければいけないのではないかというような検討もしなければならないという状況にあります。

2. 広島修道大学の場合（研究協力者 岡本徹氏）

広島修道大学が教育学科を開設したのは2年前の2016年度です。もともとは心理学、社会学、教育学の3専攻で構成される人文学部人間関係学科の1専攻で、人間の発達と形

成について学問する場として 1973 年に発足しました。2011 年度からもっぱら教員養成を専門とする専攻というかたちで小学校の教員養成を始めました。2014 年度には小学校の専修免許課程も整備しました。ところが、完成年度を迎える前に鈴峯学園との合併が決まり、これまでの小学校、中学校社会、高校地歴の免許に加えて幼稚園、特別支援学校の免許及び保育士の資格を取得できる新しい教育学科が誕生するのです。資格取得を目指す高校生が多いせいでしょうか、初年度は、定員 100 名に対して 1,530 名の受験者がありました。

教育学科をつくるにあたっては、やはり特色を出さなくてはいけないということで色々考えました。1つ目の特色は、意味のある複数の教員免許状取得を奨励し保証することによって社会的教育ニーズに応えるということです。教育再生実行委員会は 2014 年の第 5 次提言「今後の学制等の在り方について」で、①小学校教育との接続を意識した幼児教育及び幼稚園、保育所及び認定こども園における 5 歳児の就学前教育についての新たな枠組みによる義務教育化の検討、②小学校と中学校、中学校と高校の複数の学校種において指導可能な免許状の創設、複数学校種の免許状取得を促進するための教員免許制度の改革及び地方公共団体の複数学校種の免許状保有者の採用促進等を打ち出しています。これらの社会的教育ニーズに応えるために、教育学科では、初等教育コース、学校教育コース、教育科学コースの 3 つから成るコース制を 2 年生から導入しています。初等教育コースは、幼児理解ができていない小学校教員、児童理解ができていない幼稚園教諭・保育士の養成を目指します。学校教育コースは青年期・思春期が理解できている小学校の教員、児童理解ができていない中学校・高校教員の養成を目指します。仮に、小学校の教員免許取得だけで良いという学生は、初等教育コースで幼児理解も出来る小学校教員になるのか、学校教育コースで青年期・思春期の理解も出来る小学校教員になるのかを選択するのです。初等教育コースを選択した場合、カリキュラム上では、「保育内容総論」や「幼児理解の方法」の履修も卒業要件となります。教育科学コースは、学問としての教育学を深く学びながら、中学・高校の免許も取れるようにしています。発足当時の教育学専攻の歴史がこのコースに引き継がれています。奨励する隣接する 2 つの免許状を 4 年間で取得することは、カリキュラム上で保証しています。

2 番目の特色は、特別支援教育分野に貢献できる人材の養成です。先の教育再生実行会議の提言でも、教師が特別支援教育に関する知識・技能を身につけることができるよう特別支援学校免許状の取得促進が掲げられました。そこで、教育学科では新たに特別支援学校免許課程を開設しました。また、通常学級にも学習指導、生活指導の困難を感じる児童・生徒が 6.5%いるというのは有名な話ですが、普通学級の教師にも特別支援教育に関する理解は必須です。よって、特別支援学校免許を取得しないすべての教育学科学生に対しても、「重複・発達障害概論」を必修にしたり、「特別支援教育概論」等の関連科目を選択履修させたりすることにより、特別支援教育の知識・技能を保証していきます。

3 番目の特色としましては、教育学的教養の保証があります。教育学科専任教員が担当する「教育原理」「教育制度論」「人権教育論」「教育哲学」「教育史」「教育文化史」「教育社会学」「教育政策論」「生涯学習論」「社会教育計画論」「教育方法論」「幼児理解の方法」「特別支援教育概論」「重複・発達障害概論」等の 16 科目 32 単位から 20 単位以上を卒業必修科目としました。教育学的な基礎しっかりと学んで教員になって欲しいと思っています。

4番目の特色としてはIからXまでの教育学特論という科目を設けて、教員採用試験への意識づけ、不得意分野の克服並びに得意分野の発展（体育・ピアノ・絵画・声楽）、引き出しの拡大（野外活動・レクリエーション）を目指しています。例えば、教育学特論I・IIでは、学生がグループ毎に過去の教員採用試験問題を分析して模擬問題をつくり、みんなに解かせて、解説をします。要は「こんなところまでしっかり勉強しないと、採用試験には合格できないのだ」という意識づけをすることです。グループで取り組ませることをとても大事にしているのは、本学では教員採用試験に向けて大学教員による特別セミナーは行っておらず、学生たちが自分たちでグループをつくりながら、切磋琢磨して採用試験に向けて勉強していくシステムを伝統的に取っているからです。

それから5番目の特色としましては、広島市だけではなくて廿日市市や呉市とも協定を結んで大学生による学校支援活動を実施していることです。もちろん一回に限り「学校教育インターンシップ」という科目で単位化（単位）しています。単位修得以降も継続している学生も多くいます。これはずっと大事にしている活動でして、学生たちはこれで随分成長していきます。

ここから今後の課題ということなのですが、1つには「教職課程コアカリキュラム」や「教員等の資質に関する指標」が設定されて教員養成教育の内容が平準化される中で、各大学が初等教育教員養成の独自性をいかに発揮するのかがあると思います。広島修道大学では、本年4月の教職再課程認定に向けて、「大学が独自に設定する科目」に、これまで必修にしてきた「差別問題論」「人権教育論」に加えて、「社会福祉論」「特別支援教育概論」「ひろしまの教育」を設定することを考えています。

もう1つの課題としては、新学習指導要領への対応があります。カリキュラムマネジメントということが盛んに言われていますけれども、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた横断的な教育課程の編成をどのように養成カリキュラムへ取り込めば良いのでしょうか。「見方・考え方」の指導ができる教員の養成、「プログラミング的思考」を育むプログラミング教育の理解も言われています。各教科教育法の中で、これらの力を学生達にどのようにして担保していけば良いのでしょうか。社会に開かれた教育課程を目指して、教材の中に社会との関連を組み込んでいく力を養成しなければならないのですが、学生自身が実社会と随分かき離していると感じる現状の中で、どのようにしたらよいのでしょうか、そんなことを考えています。

3. 広島文教女子大学の場合（研究協力者 川西正人氏）

広島文教女子大学の学生養成の方向性を示す学科の3ポリシーについて説明します。1つ目が「ディプロマ・ポリシー」で、卒業認定、あるいは学位授与の方針という内容で最終的にこのような力を付けた学生を育てますというものです。状況を見極め適切に判断し計画を具体的な行動に移す「実践力」、自らを律し、逞しく生き抜くための「自律性」、
「コミュニケーション力」、
「専門的な知識・技能の活用力」、最後に、本学の教育理念にある、心を育て人を育てるという「育心・育人」。この5つのポイントでしっかりと力を付けた学生を育てて送り出したいということです。

2つ目が「カリキュラム・ポリシー」で、教育課程編成並びに実施の方針です。特徴的な学習内容としては初年次教育とキャリア教育の充実、BECC（Bunkyo English

Communication Center : ベック) による英語活用力育成, 関連性をもった専門教育の体系化に基づき学修します。学修方法に関して言えば ICT 機器の活用ということで, 4 年前から iPad (アイパッド) を新入生に無償で提供して iPad を使ったさまざまな授業展開というものを実践しています。具体的には, 自律学修の習慣化, アクティブ・ラーニングを取り入れた少人数学修, 育心・育人のための「育心プログラム」などを実施しています。学習成果, 評価のあり方については, GPA を活用しながら評価をしています。

3 つ目は入学者の受け入れ方針ということで「アドミッション・ポリシー」というものです。入学前教育に持続的に取り組むことができるのか, 国語の基礎的な力を付けているのか, 教育学の専門的知識や技能を習得しようという意欲があるのか, 心を育て人を育てるという教育理念を理解し心の在り方を問い続けようとする意欲があるのかが挙げられています。

次は学科の人材育成目標として以下の内容を掲げています。「教育に関する専門的な知識や技能を修得し, 主体性と協同性を持った逞しい実践力のある人材の育成」この中のキーワードとしては「専門的な知識や技能」, 「主体性と協同性」, 「逞しい実践力」の 3 つです。具体的な活動で考えると, まず「専門的な知識や技能」については, 教師論など専門教育科目を 1 年次から導入し, 教師への動機付けを高めています。さらに実践力を高めるため, 多くの模擬授業を各教科の中でやっています。また 2 年次より幼児教育コースと児童教育コースに分かれ, 加えて児童教育コースでは教科ごとに国語, 算数, 理科, 社会, 音楽, 図画工作, 体育, さらに加えて教育学, 教育心理学, 情報教育という 10 の専修をつくっており, より深い学びをしています。少人数の中で専門的な学びをしていき, 将来自信が持てる専門分野を持って送り出したいと思っています。加えて, ゼミの中で縦の関係ができるというのが非常に良いことではないかと考えています。続いて「主体性や協同性」については, 2 年次での野外活動の企画・運営, 具体的に言えば学生中心の実行委員会による主体的な運営です。全メンバーが何らかの役割を担い, 自然の中で仲間と共にという体験の中で協同性を身に付けています。加えて, 行事ごとに組織をつくり自ら運営し, 組織の中での動き方を学びます。2 年次に観察実習, 3 年次は本実習を行います, ここでも学生自身が実行委員会をつくって教育実習報告会の企画・運営等もすべてやっています。4 年次ではチャレンジセミナー, 簡単に言えば教員採用試験対策のセミナーなのですが, その企画・運営も学生自身がすべて担当して進めています。「逞しい実践力」については, ボランティア活動を勧めています。特に野外活動関係は多くの学びがあるということもあり一番よく勧めている活動です。小学校のボランティア活動, 児童館のボランティア活動等も子ども達のいろいろな実態に触れながら実践力を付けていってくれていると思います。あと学友会活動やクラブ・サークル活動の参加にも積極的な参加を勧めています。アルバイトは積極的に勧めているわけではないのですが, 家庭教師とか塾とかのアルバイト等は将来に繋がりますし, そうではないアルバイトでも社会的なマナー・スキルを身に付けるという意味でも, ある程度は役に立つのではないかと考えています。

「教採 (教員採用試験) に向けて」ということでは「顔晴りとセミナー」があります。この 2 つがメインになっているものです。最初の「顔晴り」というのは, 普通「頑張る」というのは頑な (かたくな) という字に緊張の張 (ちょう) ですが, 十数年前から, 学生たちが, 将来の夢に向かって最終的に顔が晴れるようにという意味で, 教採活動のキーワー

ドとして「顔晴り」という言葉を使うようになりました。この活動は教採に向けての「合格体験発表」「合格体験記」といった後輩への支援活動の企画・運営を学生が主体的に動いて実施してくれているものです。最近では、不合格の学生や一般就職の学生の発表なども入っています。次に「セミナー」は、やはり学生主体で企画・運営するものですが、教員の課外支援ということで春期セミナー・前期セミナー・夏期セミナー・後期セミナーをやっています。やってほしい内容を学生から提案して教員がサポートしていくというかたちのものです。まとめると、「顔晴り」の活動の中では[仲間力]と[熱い思い]が機能し、学生による主体的な活動が効果を上げています。また、「セミナー」では[過去の実績]を踏まえた学びに全教員の[全面的なサポート]で協力しています。

「今後の課題」については、「教育現場のブラック化への対応」を教育委員会の先生方をお願いしたいと思います。ただし、教育者が時間を度外視して真面目に一生懸命やるというのも大事だとは思いますが、教員を養成している大学としては、普通の生活のために基本的には8時間労働をある程度意識していることが大事なのではないかと考えています。2つ目の「人としての自分磨き」というのは、将来教員を目指す学生には、多方面が見られるような広い視野を持ち、常に成長し続ける人として育てていくことが大切なのではないかと思っています。最後に、「人生観、世界観」を入れてみました。最終的にはその人の人間性によって物事が決まります。特に教員は人を育てる職業であるためその意味は特に大きいと思います。そのために、物事を深く考える習慣を付けるような学生を育てていかなければならないのではないかと最近強く感じています。自分の生き様を大切にするような学生を育てていきたいと思っています。

4. 考察

各大学とも同じような教員養成のシステムを持ちながら、独自の取り組みを行っている。これらの独自性を保持しつつ、どのような内容で大学連携を行っていくか、また、そもそも大学が連携していくことがそれぞれの大学の共存共栄につながるかを考えなくてはならない。広島県内の大学に共通した特徴が見られるわけではなかったことから、広島県にローカライズした、という発想よりも、連携する大学の独自性を保持した形でのローカライゼーションが必要であろう。

(池田吏志*・岩坂泰子*・寺内大輔*・永田忠道*・中村和世*・松宮奈賀子*・難波博孝*)

IV 研究の成果と今後の課題

成果としては、コンソーシアムを作るにあたっては、組織としての日常業務として動く体制を整えなければならないことがわかったこと、また、大学連携のコンソーシアムを作るにあたっては、各大学の独自性を保持しつつそれらを活かした連携事業に取り組む必要があることがわかった。今後、これらのことをふまえて、連携のあり方を模索したい。

(権藤敦子・朝倉 淳・伊藤圭子・植田敦三・木原成一郎・木村博一・松本仁志・山崎敬人・池田吏志*・岩坂泰子*・寺内大輔*・永田忠道*・中村和世*・松宮奈賀子*・松浦武人・大後戸一樹・難波博孝*)

引用文献

大阪教育大学（2015-2017）「学びの架け橋 教職コンソーシアム通信」

第1号～第10号 府立高校教職コンソーシアム